

一八九八年平壤民乱について

林 雄 介

目 次

- 一、はじめに
- 二、民乱の背景
- 三、民乱の展開
- （一）平壤の状況
- （二）民乱の発生
- （三）事態の収束と日本人の対応
- 四、おわりに
- 一、はじめに

一八九四年の甲午農民戦争が朝鮮史上最大の農民抗争であったことは疑いようのない歴史的事実であり、それを反映してこの農民抗争に関する研究は膨大な量にのぼる。そしてそこでは「反封建」「反侵略」はその二大特徴とされてきた。ところで、従来の研究においてはその「反封建」の側面については近年の郷村社会史研究の進展とも相まって質、量共に急速に深化してきているが、「反侵略」（具体的には反日）の側面に

については当為とみなされ、その淵源や展開過程については等閑視されてきた感を否めない。しかし、保護国期の「抗日ナショナリズム」を経て三・一運動において一つの完成を見せる朝鮮のナショナリズムが、「反日」を重要な契機としていることが明らかである以上、それ以前の時期における朝鮮ナショナリズムのありようも当然に俎上に上げられるべきであろう。¹⁾

こうした観点から、筆者はかつて甲午農民戦争以後の朝鮮の民衆運動を検討したことがあるが、²⁾ ここでは一九世紀末から二〇世紀初頭にかけての民衆の対日認識について以下のような大まかな見通しを示しておく。すなわち、甲午農民戦争において「反日」が唱えられたのは、運動の合法性獲得のためであったり、あるいは全州和約で一旦は開化派政権から実施を約束させた改革の実行を阻害するからであったり、あるいは王宮を占領して国政を恣にする存在であるからであり、直接に自らの生活を破壊する存在であるという理由からではなかったこと、したがって、その後日本が政治的に後退する時期には、穀物搬出などの経済的侵奪は深化しているにもかかわらず、民衆運動において「反日」色が消滅す

ること、そうした状況が変化を見せるのが世紀の境を前後する時期であり、日本を自らの再生産の阻害者、決定的に排除されるべき存在と認識した民衆運動が現れてくること、そうした運動の担い手は、生産現場から遊離したか、もしくははしかかっている、穀物購買層に属する最下層の民衆（第三章第二節で述べる③の類型）であり、かれらはやがて後期義兵の中心的勢力として歴史に登場するなど積極的な反日闘争を展開し、朝鮮ナショナリズムの本格的展開を準備する存在として評価されるべきこと、等である。

ところで、この検討を通じて筆者は一八九八年三月に平壤で発生した民乱に注目した。さきにも述べたとおり、甲午農民戦争以後の民衆運動においては「反日」色が消滅していく。そしてその主たる発生要因は土地所有権問題や賦税運営をめぐる問題であった。米穀輸出による穀価騰貴に起因する民衆蜂起も各地で発生していたが、それは基本的には「輸出市場との結びつきが、在来市場内部の米穀販売者層と購買消費者層との対立を極限までおしすすめた」⁽⁴⁾結果であって、その主たる攻撃対象は朝鮮人米穀商人や富農、買穀に関与する地方官などであった。ところが、平壤のケースは、その攻撃対象に朝鮮人がまったく登場せず、日本人商人のみである。日本人の米穀買い付けにおいて朝鮮人米穀商人や富農、地方官がまったく関与しなかったとは考えられない。すなわち、構造としては穀価騰貴に起因する他地域の蜂起と同様でありながら、その攻撃対象は日本人商人のみという、対日認識の変化という観点からするときわめて象徴的な事件であり、日本を自らの生存を脅かす存在として認識し、直接打倒対象として多数の人々（史料には「凡ソ忒千名」と表現さ

れている）が立ち上がった民衆運動は恐らく朝鮮史上初ではないかと思われる。このように、朝鮮のナショナリズムを考える上において、ある意味で画期的な意義を持つとも考えられるこの民乱について、従来の研究はまったくと言っていいほど言及してこなかった。⁽⁵⁾それは、基本的にはこれまでの研究者がこの民乱に関心をはらうことがなかったということのだが、もう一つ別の理由もありそうである。実は、この民乱については、当時の史料にもほとんど記録が残されていない。非常に短期間に収束したことがその原因であると思われるが、朝鮮側の史料を見る限り記述はほとんど皆無である。あるのは、攻撃される側に立ってしまつた日本側のわずかな官憲史料のみと言つてもよい。したがって、本稿は初めから史料的な制約を抱えて出発せざるを得ないのだが、にもかかわらずあえてこの民乱を取り上げるのは、上にも述べたとおり、朝鮮のナショナリズムの展開過程を考えるうえで避けては通れない事象であると筆者が判断しているという、その一点による。

二、民乱の背景

平壤民乱が発生するのは一八九八年三月であるが、ここではその背景となる当該時期の朝鮮の経済状況、特に穀物の需給状況について概観しておこう。

平壤周辺では、一八九六年がかなりの豊作であったのに比して、一八九七年は一転して収穫が平年の七〇割に落ち込んでいた。⁽⁶⁾また、京畿道・忠清道・江原道・咸鏡道は「昨秋失稔、畿甸湖西關東關北、為尤甚、民莫聊生」⁽⁷⁾と表現されるように、明らかな凶作で、全羅道、慶尚道も一

八九六年は大豊作、一八九七年は平年並みであったが、一八九七年産米の収穫後の時期になっても、穀価上昇の傾向を見て取った農民らの売り惜しみ等により、市場に回る米は非常に少なかったといふ。⁽⁸⁾このように、一八九七年の十一月頃から翌年にかけて、全国的に穀物の市場流通量が少ない時期が続いた。また、この不作が影響したものと思われるが、結果として米の対日輸出は一八九七年の七五二、〇七一石から一八九八年には二五五、九〇二石へと激減し、平均の米単価は同じく七、九九円／石から一〇、五七円／石に急騰している。⁽⁹⁾特に春には「況値窮春、日急一日、原野之間、甌石無儲、場市之中、價直騰踊、嗷嗷遑遑、無計糊口⁽¹⁰⁾」と言われるように、飢餓状態を呈していた。さらに、これを加速化させたのが商人や地方官による投機的行動であった。当時の新聞は次の様に伝えている。

各道各郡の郡守のうち利益のみ貪る者どもと、奪財のみを事とする御史が各地で公錢をもつて買穀し、船に載せて各港口に送り、外国人にのみ高価で発売し、京江各所の客主に送った穀食を客主の倉庫に隠しておき、穀価を恣に引き上げるので、度支部への上納も遅れがちになり、ソウルの人々は皆餓死しそうである。また、ソウルの裕福な者たちも、この機に乗じて京江各所で買穀し穀食を隠すので、最近、ソウルの人民の状況がきびしくなっている。⁽¹¹⁾

こうした状況をうけて、政府でも救恤策として穀物を民衆に放出しようとしたものの、備蓄穀物が底をついた状態となっていたため、各地域

ごとに事態の深刻度を勘案し、それに応じて金を支給するという、緊急避難的措置を講じることしか出来なかった。⁽¹²⁾これに対して民衆の側からは、次の様に国王に防穀令の発布および外国勢力の排除を要求する運動がおこってくる。

一昨日、午後一時に、前秘書丞洪鍾宇氏が、大小人民千余名とともに慶運宮仁化門の前で一斉に進伏して疏本を差し上げたのだが、その大略は次のとおりである。穀食の価格が突然高騰し、人民が皆餓死しそうな状態であるが、これは皆、外国人らが買穀するためであるから、ただちに防穀令を下されて本国人民が生きていけるようにしてください、外国の兵站を追放なさり、外国人が許可証なしに国内を歩き回れないようになさり、絶影島に外国租界を明確に設定なさり、漢城内の外国人の開市を一切追放なさり、外国通貨は使用せず、我国の通貨のみを使うようにしてください、というものだったといふ。⁽¹³⁾

さらに、日本側の史料にも

白米玄米共可也出廻リアリ是レ必竟本邦相場ノ高値ナルト一方ニハ春來氣候ノ不順ナル耳ナラズ實際處ニヨリテハ穀物ノ欠乏ヲ告グルヨリ又防穀令發布云々ハ當國地方ノ輿論ノ如キ觀アルヨリ到底發布ハ避クベカラザルモノト考ヘ發布前輸出シ終ランモノト内外商等競テ運出セシニ由ルモノトス⁽¹⁴⁾

とあるように、防穀令の発令は不可避であるとの見方が広まっていたようである。しかし、結果として朝鮮政府は最後まで防穀令を發布することはなく、五月二十六日、出て行く穀物を止めるのではなく、入ってくる穀物を増やす方向、すなわち、五ヶ月間に限り、穀物に対する輸入関税を免除するという内容の命令を発して事態の收拾を図ろうとした。⁽¹⁵⁾

また、清からの仁川への穀物流入の影響もあって穀価は一時小康状態を保ったようであるが、「一時拾壹圓臺ニ落チシ上玄米モ（五月——林）下旬ニハ再ヒ拾貳圓ノ聲ヲ聞クニ至リタリ之ヲ二三年來ノ實例ニ徴スルニ當港（仁川——林）相場ハ昇降共日本相場ニ支配サレ一タビ日本ニ於ケル相場下落ノ報アルヤ低落ニ伴フ人氣ノ作用ハ急流直下ノ状ヲ呈スルヲ常トセシガ此回ハ日本相場低落ニ向カヘルニ方リ當港相場ハ著シキ高値ヲ維持スルノミナラス目下ノ状勢ヨリスレハ寧ロ上昇ノ傾アリ蓋シ近來ノ異例トスヘシ⁽¹⁷⁾」という記録にもみられるとおり、穀物価格は高値で安定する傾向にあったと考えられる。ともあれ、平壤民乱は、以上述べてきたような穀物需給状況のなかで発生したのである。

三、民乱の展開

(一) 平壤の状況

平壤民乱は穀価騰貴を基本的な原因として発生するが、そもそも平壤は穀物の産地であったわけではなく、主に黄海道の安岳、載寧、鳳山等の地域からの穀物の集散地であった。⁽¹⁸⁾日本人の本格的進出は日清戦争後のことであるが、一八九七年二月の仁川領事館の報告に「昨夏以來平壤ヨリ仁川へ輸出シタル米ハ凡五萬石ニ上リ其十ガ八ハ我商人ノ買付ケ

タルモノナリト云フ⁽¹⁹⁾とあるから、一八九七年一〇月の鎮南浦開港以前から日本人商人がこの地域の米穀流通ルートに深く入り込み、かなり大規模に買い付けを行っていたことがわかる。その方法は基本的に二通りで、「其集散地タル平壤韓問屋ニ前貸ヲナシ之ニ買込ヲ托シ石何程ト一定ノ口銭ヲ給」する方法と「前記産米地方（安岳、載寧、鳳山等——林）ニ入り込ミ地方ノ問屋又ハ庄屋等確實ナル者ニ托シ前金拂ヲナシ五俵乃至十俵宛集メシムル」方法があつたが、いずれも資金の前貸しを前提としているため現金を準備する必要があり、「信用アル商人ノ巧ミニ其間ニ運用セルハ必竟地租其他國税ノ納入ヲ利用スルニアリ」という表現にみられるような地方官との結合を随伴するものであつた。⁽²⁰⁾このように、平壤周辺地域における穀物流通に日本人商人は深く関与していたのだが、その行動様式は同時期の他地域におけるそれと大きな差異が認められるものではない。

ところで、鎮南浦領事館は、一八九七年における平壤周辺の米価格の推移を「價格ノ如キ春期ニ在ツテハ石五圓内外ニシテ其後漸々上進セシモ八九月頃買出シ元ニ於テハ尚七圓ノ上ニ出デザリシガ内地ノ騰貴ニ連レ結局石十圓ノ新直ヲ表ハシ終航前後各商人ノ轉送ヲ競フ頃ハ殆ンド十圓ニ踏入ラントセリ⁽²¹⁾」と報告している。すなわち、前年の豊作もあって春先には比較的安価で推移していたものが、徐々に上昇傾向を示し、終航、すなわち大同江の結氷（十二月中旬頃）を前後する時期には一石あたり一〇円台にまで接近したというのである。では、民乱の発生した一八九八年の状況はどうであつたろうか。表1は鎮南浦における当該時期の米相場をまとめたものである（一八九七年二月は平壤の相場）。見

表1 鎮南浦の白米単価推移
(円/石)

年月日	上	中	下
1897. 2	6.50	6.00	5.60
1898. 2	10.30	10.00	9.50
1898. 3 上旬	10.80	10.50	10.00
1898. 3 中旬	11.00	10.70	10.20
1898. 3 下旬	11.60	11.30	10.80
1898. 4	12.50	—	—
1898. 5	13.47	—	—
1898. 7	13.50	13.20	12.90
1898. 8	13.80	13.50	13.20

出典：『通商彙纂』64、96、101、102、105、111、114号により作成。
97年2月は平壤のデータ。

られるとおおり、民乱の発生した三月には、低品質のものでさえ前年に「新直」と表現された一〇円を示していて、これ以後は価格上昇の一途である。

こうした高値の原因についてはいくつか考えられるが、特に三月においては大阪での米相場の騰貴、およびそれに附随する商人の投機的行動が大きかったようである。鎮南浦を出た米穀はそのほとんどが一旦仁川に入ることになるのだが、その仁川領事館は一八九八年三月の状況を次の様に報告している。

昨今其(米——林)相場ノ騰貴スルコト殆ト底止スル所ナク前月下旬ニ於テハ拾貳圓四拾錢ナリシ上白米ハ本月上旬ニハ拾貳圓八拾錢ニ上リ中旬ニハ更ニ騰貴シテ拾三圓臺ヲ超ヘ下旬ニハ拾三圓八拾錢ノ呼直ヲ聞クニ至リ(中略)：寔ニ空前ノコトニシテ之レ畢竟本邦ニ於テ當國米ノ需要迫日加ハリ来リ益々好價ヲ以テ購買セラル、ニヨルコト勿論ナリト雖モ所謂人氣ノ作用モ亦其暴騰ニ與ツテ力ナシトセス現ニ

韓商ノ如キハ一般ニ強氣ヲ持シテ常ニ高直ヲ唱ヘ又本邦商人中ニモ前途見込ミ思惑ヲ以テ方外ニ買進ムモノアリ旁其結果ハ遂ニ大坂相場ニ對比シテ算盤上不引合ノ相場ヲ示スニ至レリ⁽²³⁾

四月にはそれがさらに進み、仁川領事館は

當港相場ノ一上一下ハ皆大阪相場ノ反響ニ過キサリシニ本月ニ入りテ全ク變象ヲ呈シ當港相場ハ大阪相場ニ比シテ算盤上常ニ適當ノ程度ヲ逸脱シ本邦輸出ハ不引合ナルノ事實ヲ示セリ(中略)：刻下ノ事情ニ於テハ其高低ハ大阪相場ニ支配セラル、ヨリハ當國內ニ於ケル需供ノ關係ニ因テ動カサルノ事實多キヲ以テ⁽²⁴⁾

と報告するにいたる。すなわち、大阪よりも仁川の米相場の方が高い状態、言い換えれば、日本ではなく朝鮮内部(具体的にはソウル周辺)への米の流れが優勢となる事態である。このことは、当然に鎮南浦からの出米にも影響を与えた。三月の鎮南浦領事館報告では

結水中買集メ置キシ穀物ノ出張リ非常ニシテ僅々五六戸貿易商ノ取扱ニカ、ルモノトハ云ヘ一時ハ非常ナル出廻リニテ何レモ内地ノ暴騰ヲ見込ミ我先キニト出米ヲ急キシカバ⁽²⁵⁾：

と報告されていたものが、四月には

下旬ニ至リテハ本邦相場漸ク下向キノ兆候ヲ呈セシモノカラ直輸出ハ一寸氣迷ヒノ姿ナルニ關セズ當國京城ハ實際ノ欠乏アリ非常ノ高値ヲ見ハシ本邦相場ノ如何ニ係ハラズ仁川廻米ハ依然絶エザル姿ニテ終ニハ京城相場ヲ目安トシテ賣買スルニ至レリ⁽²⁶⁾

となり、五月には

輸出貿易ハ非常ナル變態ヲ現ハシ前月本邦へ向ケ六万余圓ノ輸出アリシ穀類ハ今月ニ至リ頓ニ一粒ノ輸出ヲ見ズ全ク仁川貿易ト變シ去レリ此必竟本邦相場低下セシニ由ルモノナルモ京畿道特ニ京城地方穀物ノ欠乏ハ實際非常ニシテ一時石拾六七圓ノ高直ヲ見シカバ京城へ輸送スル方利益多キヨリ扱前記ノ變態ヲ生ゼリ⁽²⁷⁾

となつてゐる。これらを要するに、平壤から鎮南浦へ送られた米穀は、一八九八年三月頃には大阪相場に引きつけられる形で主に日本向けに輸出され、四月中盤以降からは国内市場、主としてソウル周辺向けの穀物として搬出されていったということが出来る。このように、「最終目的地」がどこであつたかという差異はあれ、周辺地域から平壤に集められた米穀は、高騰する相場に引きつけられて域外へと流出していった。その結果が表1に現れた米価騰貴なのである。日本の官憲史料に「平壤細民」と表現された穀物購買層の民衆にとつて、それは受忍限度を超えるものであつた。

(二) 民乱の発生

一八九八年三月十五日の午後、平壤の民衆が蜂起する。当日の状況を鎮南浦領事館の報告から再現してみよう。⁽²⁸⁾

去ル一五日午後、平壤韓人凡ソ式千余名暴發シ平壤郡守ニ迫リ日本人民ノ米穀輸出差留メ方ヲ嚴談ニ及ヒシカ郡守ノ回答其ノ要領ヲ得ザルアリシテ乱民等ハ郡守ヲ擁シ更ニ觀察使ニ迫リ、暴言乱語聞クニ堪エザルモノアリ本邦人民中其有様ヲ知ラントテ近ツキシモノ両三名アリシカ忽チ例ノ石礫ヲ投ゲ始めシモ乱民中日本人ニ危害ヲ加フルノ不得策ナルヲ疾呼スル者アリ為ニ僅カニ危険ヲ免カルルヲ得タリ乱民等ハ百名乃至三四百名宛空地重ナル本邦貿易商店ニ押シ掛ケ滿城ノ韓民飢餓ニ瀕スルノ状ヲ陳シ米穀ノ積出シハ決シテ出来ズトノ意ヲ談ゼシモ言語動止至極穩和ナリシ⁽²⁹⁾

これが民乱の第一段階で、基本的に日本人に対する物理的攻撃は自制されている段階である。この段階を指導したのが李謹相という人物であつた。

蜂起ノ原因ハ必竟米価ノ暴騰ニシテ其魁首トモ目スベキモノハ李謹相(第五回平壤續誌編纂者ノ一人ト記憶ス、恐ク學者ナラン)其他城内外ノ重立チタル者細民今日ノ困弊ヲ見ルニ忍ビス而テ之ヲ救フハ米穀ノ輸出ヲ暫時見合スヨリ他ニ手段ナキモノトシ一方ニハ日本商人ニ懇願シ輸出方猶豫セシメ一方ニハ觀察使ニ對シ防穀令ヲ布カシメントノ

穩和ナル方法ヲ計画セシガ⁽³⁰⁾：

李謹相に連なるグループはこの「穩和ナル方法」という方針を堅持しており、翌十六日にも次のように「穩和」な「請願」を行っている。

而テ翌一六日李謹相等重立チタル者四〇余名来リ我巡查ニ對シ請願スル言ニ甲午以後当平安道人民ノ貴国ノ高誼恩徳ニ感スルノ深キ言ヲ俟タザルモ如何セム目下時近穀物不足シ府民ノ將ニ飢餓ニ迫ラントスルハ公等ノ認ムル所ナルベシ日韓間條約知ラザルニ非ザルモ之ニ拘泥シテ全府民拱々餓死ノ悲境ニ陥キルヲ座視スルハ公等ト雖トモ忍ヒザル所ナルベシ而テ之ヲ救恤スルハ一先ヅ米穀ノ積出ヲ中止スルヨリ急ナルハナシ云々申出テタリ⁽³¹⁾

このように、第一段階の指導者と目された李謹相らのグループは基本的に郡守、觀察使、日本人商人、日本官憲にたいして穀物搬出の中断を請願するという形式をとっていた。こうした請願形式の運動は、それ以前にも觀察使にたいする防穀令発令要請という形で行われていたようである。実際、それをうけて觀察使から政府に防穀令発令を要請した形跡がある⁽³²⁾。ところが、民衆のなかに、指導者の意図を超えて実力行使に出るグループが発生した。

而ルニ此時城外ニアリシ本邦一商店ニ於テハ米凡ソ五百呎ヲ船積シ終リ將ニ出帆セントスルノ際四五百ノ乱民群集シ来リ渠等ニ於テ忽チ全

店前ニ陸上ゲヲナシ決シテ積出シヲ肯ゼズ番人トシテ百余名ノ乱民ヲ付シ置キ他三百余名ノ乱民等ハ下流万景台ニ向ヒ既ニ米穀ヲ積載シテ下リタル十四五艘ノモノヲ差止メントテ追行ケリ此際全地出張ノ我巡查ハ乱民ノ蜂起ヲ聞クヤ否ヤ直チニ觀察使ニ面会シ本邦商人ノ生命財産ノ保護ヲ請求シ郡吏総巡及巡檢ヲ同行シテ各商店ヲ保護シ特ニ前記城外商店ニハ巡檢二名ヲ看守ニ附シ他巡檢十名及本邦商六七名ヲ引率シテ乱民ノ向ヒシト聞ク万景台ニ馳セ付ケシニ乱民等ハ既ニ立去リシ後ニシテ貨物等ハ凡テ異常ナキモ乱民等ハ各船頭ニ對シ此船ハ他ニ動カス可カラズ貨物ハ他へ移ス可カラズ日本人来リ如何ニ命ズルモ我等ノ命ナキ限りハ一切応ス可カラズ若シ此ニ背クトキハ悉ク打殺スベシト云ヒ又同●村長ヲ呼出シ該船舶ノ看守方ヲ申付ケ誤アレハ同様打殺スベシト云々申渡シノ上引上ケタル由時既ニ深更ニ及ビシカバ我巡查ノ一行ハ其儘一先ヅ平壤へ引取レリ(中略)：細民等ハ巨魁等ノ制止セルヲ聴カス今回ノ暴挙ニ及ヒシモノナリト云ヘリ(●は判読不能)

これが民乱の第二段階である。「請願」という形を越えて、船積みされた穀物を陸揚げしてしまったり、出航済みの日本商船を追走して停止させたりする実力行使に出ているわけである。ここに見られる行動様式は、李謹相らのグループとは明らかに異なっている。李謹相という人物は一八四七年生まれで当時五〇才、病氣休職中ではあったが平壤鎮衛隊一等餉官であり、一九〇三年には正三品陸軍正尉にまで出世している⁽³⁴⁾。

地元では相当の人望を集めていた人物であろうと思われる。また、啓蒙運動時期には大韓自強会平壤支会設立に奔走するなど積極的に活動して

いることが確認されるのである。⁽³⁵⁾ 筆者はかつて、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけての朝鮮民衆のありようを、対日認識という観点から①生産現場に定着して再生産を維持することが可能であり、日本にたいして好意を持つてはいないものの、生活を捨ててまで闘争に立ち上がることはなかった圧倒的多数の民衆、②生活水準としては①と同様でありながら、時代の影響をうけつつ韓末啓蒙運動の流れに合流していく民衆、③直接的に日本によって自らの生活を破壊され、生活防衛のために日本を打倒対象とした戦いに参与せざるを得なかった民衆、の三類型に分けて考察したことがあるが、大雑把にみれば李謹相のグループは②に、直接行動に出たグループは③に属すると考えられる。すなわち、啓蒙運動時期には交わることのなかった②の系列と③の系列であるが、この時期にはまだ共同歩調をとる余地が残されていたことを示す事例であるということができるのである。

(三) 事態の収束と日本人の対応

一部のグループが強硬手段に出たものの、「扱コソ乱民ノ多カリシ割合ニ本邦人ノ生命ハ勿論、財産ニモ格別ノ危害ヲ加ヘザリシ」といわれるごとく、穀物の搬出を一時制止しただけで、それ以上の混乱はなかったようである。翌十六日には李謹相グループが「本邦人ノ一旦船積ミセシモノヲ陸上ケシ又万景台事件等」について「其不都合ヲ詫ビ」たこともあって、事態は収束の方向に向かった。穀物搬出にともなう穀価騰貴が原因であるから、事態収拾策は安価に穀物を提供するという方向で調整された。

本邦商ヲ集メ米穀積出シノ中止ハ到底能ハザルモ此際救恤の方法ヲ講スルコトトシ終ニ各商応分ノ米穀ヲ支出シ時価ヨリ幾分ノ低価以テ城内外細民総テノ需要ニ應スルコト、賣出場所ハ彼等ノ指定ニ応スルト、此等悪慣例ヲ再演セシメザルコト外、三四ヶ条ノ議決ヲナシ之ヲ以テ乱民鎮撫方及米穀輸出方ニ尽力セシガ、終ニ本日(三月十八日——林)我商人ヨリ米穀ヲ低価ニ賣出シ且ツ無事ニ米穀船積ミシ我巡查及人民総代当觀察使面前ニ於テ米穀輸出ニ関シ今後如何ナル場合アルモ一毫苦情ナキ旨ヲ巨魁等ニ誓言セシメ、人民平穏トノ電報ニ接セリ⁽³⁸⁾

表1に明らかのように、この措置によって穀物相場が下がったわけではないから、あくまでも平壤市民向けの限定的な穀物の特別放出であり、その意味では彌縫策に過ぎないのだが、ともあれこうしてこの民乱は一応の収束を見る。ただ、この民乱から在留日本人が受けた衝撃は相当に大きかったようである。

我貿易商等ハ尚彼レ細民等ノ再ヒ激昂センコトヲ恐怖シ今日(三月二十六日——林)ニ至ルモ更ニ賣買取引ヲ為サズ只空敷時機ノ至ルヲ待ツト云フニアリテ果シテ何レノ日乎時機ノ至ルコトアルヲ認ムル能ハズ依テ小官ハ各貿易商ニ論スニ彼等細民ノ為メニ我商權ヲ害セラル、等ノコトアラバ甚ダ不面目已ナラズ将来ノ不得策ナルヲ以テ自今恐怖ノ念ヲ去リ進ンデ取引ヲ為スベキ旨ヲ以テシ翌廿七日ヨリ従前ノ如ク賣買取引ヲ為スコトトシ已ニ決行シツ、アリ⁽³⁹⁾

日本人がこうした反応を見せた背景には、その二年程前、初期義兵に攻撃された記憶があったのではないかと思われる。一八九六年三月の段階では二百人近い日本人が平壤に在留していたのだが、義兵の攻撃にさらされる中で、その居留民全員が一斉に引き上げざるを得ないという事態となった⁽⁴⁰⁾。事態が沈静化したのが同年の五月頃で、表2はその半年後

表2 平壤在留日本人人口

年月日	男	女	合計	戸数
1896.12中	45	13	58	23
1897.12末	63	16	79	39
1898.3末	77	17	94	35
1898.4末	58	22	80	36
1898.5末	55	21	76	30
1898.6末	57	23	80	32
1898.7末	57	27	84	32
1898.8末	58	24	82	33
1898.9末	61	24	85	34

出典：『通商彙纂』64、101号、『官報』4463、4515、4543、4550、4581、4607号

からの平壤在留日本人人口の推移である。見られるように、一斉引き上げから徐々に増加してきていた人口が、この民乱を境に再び減り始めている。日本人にとつての衝撃の大きさを物語るものと言えよう。

こうした居留民の状態を立て直すために組織されたのが「同盟団結」という互助会組織で、以下はその規約である。

團結誓規

一・本會ヲ同盟團結ト称ス

一・本團結ハ平壤在留民一般ヲ拳テ組織ス

一・團結ニハ三名ノ世話掛リヲ推撰シ其部下ヲ統御スル事
 一・團員結員ハ警察官保護ノ下ニ立チ其筋ノ命令ニ服従スルハ勿論世話掛リハ其間ニ奔走シ大小トナク警官ノ方針ヲ抱持シ機敏ニ其任務ヲ実行スル事

一・形勢不穩ノ兆アルトキハ世話掛ハ其事実ノ眞否ヲ探究シ直ニ之警官ニ申告シ部下ノ為メ充分ノ保護ヲ請願スル事

一・世話掛ハ擔當局部ヲ定メ事変アルノ時ハ神速ニ部下ニ警報ヲ傳ヘ部下ヲ纏メ屯集所ニ馳付ク可シ

一・團結員カ防衛ヲ為スノ屯集所ハ警官出張所ト定ム

一・部下ハ世話掛リノ指揮ニ應ジ迅速ニ屯集所ヘ馳付ク可シ必要ノ貴重品ヲ携帯スベシト雖トモ決シテ自体一身ノ利害ニ戀々トシテ其筋ノ命令ニ背馳ス可カラズ

一・團結員ハ事体ノ不穩ト認メタル時ハ可及的其實虚ヲ探偵シ急ニ之ヲ警察官若クハ世話掛ヘ申告スヘシ

一・團結員ハ此誓規ヲ抱体シ内ハ同胞間ノ親睦ヲ温メ外ハ韓人ニ對シ務メテ敦厚ヲ旨トシ仮リニ暴激ノ言ヲ為シ自ラ事端ヲ攪乱ス可カラズ

一・團結員ハ其筋ノ警報ニ接スルヤ老幼婦女ヲバ第一ニ屯集所ヘ送り届ケ身体動作ノ躓蹉ナキ様ナス可シ

一・團結員ハ須ラク常ニ護身器ヲ具備シ置ク事

一・世話掛不在亦ハ病氣中ニハ投票結果ノ次点者はガ代理ヲ為ス事

右之通遵守可致意事

明治三十一年四月⁽⁴²⁾

この第十二項にある「護身器」とは銃器のことであり、警察と一体となつたうえに自らも武装して自衛しなければならぬような事態に陥つていたのである。この「同盟団結」が奏功しての結果かどうかは定かではないが、在留日本人口の減少傾向に歯止めが掛かり、こうして再組織された居留民らが、この年八月の平壤開市を迎えることとなるのである。

四、おわりに

穀物の廉価放出という彌縫策によつてこの民乱は発生から三日後の三月十八日には収束した。しかし、表1にみられるような米価騰貴の傾向は一部のグループにとつては容認できるものではなかった。五月にいたつて、一部が再び蜂起する。

其後兎角人心不穩ノ兆有之事ニ觸レ出發致候儀ハ畜ニ數回ノミナラス然ルニ本月廿日又々蜂起ノ模様有之翌廿一日ニ至リ細民八九十名集合シ城内各韓米商ニ就キ米價暴騰ノ今日外人へ米穀ノ賣渡ヲナスノ不都合ヲ罵詈シ三四ヶ所ノ磨粉器具ヲ破壊スル等形勢容易ナラザル姿アリ郡守ハ直ニ巡檢ヲ具シ、徒党ノ重立チタル者ヲ集メ説諭ノ上一旦解散セシメタリ。然ルニ細民等ハ更ニ轉シテ觀察府ニ至リ防穀令施行方ヲ迫リタルモ此亦其拒絶ニ逢ヒ終ニ解散セリ云々⁽⁴⁴⁾

李謹相らのグループは上述のとおり「米穀輸出ニ関シ今後如何ナル場

合アルモ一毫苦情ナキ旨」を「誓言」していたから、このとき蜂起したのは三月蜂起で実力行使に出たグループであつたと考えられる。穀価騰貴をもたらず穀物搬出を差し止めようというのであるから、目的は三月蜂起と同様なのだが、問題はその攻撃対象である。見られるとおり、今回は「韓米商」がその対象であり、一部は器具の破壊にまで及んでいるのに対し、「本邦人ニ対シテハ何等ノ危険ノ虞無之ヤニ見受ラレ」た⁽⁴⁵⁾という。「穀物欠乏価格暴騰シテ細民困難セルハ實際ノ事実ニ有之今後尚多少ノ蜂起ハ免レサルヘシト存候」⁽⁴⁶⁾というのだから、状況は全く好転してはいないにもかかわらず、何故日本商人は攻撃対象からはずれたのか。もちろん、前章末でみた「同盟団結」の成果ということもあろう。しかし、それならば逆に、なぜ三月蜂起では「韓米商」が攻撃対象にならなかつたのか問題にされねばならない。

前章第二節において、この時期には筆者なりの分類による韓末民衆の三類型のうち②と③が共同歩調をとる余地が残されていたと述べた。ここに、この問題を解くための鍵があるように思われる。筆者は③の類型が朝鮮史上に登場してくる例として平壤民乱以外に英学党運動と活貧党運動をあげたが、英学党の指導者李化三は元学部主事で、万民共同会で演説をした経験も持つ人物であつた⁽⁴⁷⁾、活貧党宣言書の執筆者は士族であることが明らかである⁽⁴⁸⁾。すなわち、いずれの場合も知識人が深く関与しているのであつて、③の類型の民衆のみの運動ではないのである。こうして見てくると、日本により生活を破壊され、日本を直接打倒対象として立ち上がるのは③の類型の民衆であることは間違いないのだが、これらが日本の侵略を構造的に把握し得た背景には知識人による媒介があつ

たのではないかと考えられる。実は、初期義兵が一段落した直後の一八九六年八月の調査報告では「平壤地方ノ一般人民ハ敦厚朴訥ニシテ其本邦人ニ對シ特ニ好感情ヲ呈スル」とか、「農民ノ本邦人ニ對スル厚遇信認ハ殆ド豫想外ニシテ之ヲ全羅道地方ニ比スレバ雲泥ノ差アリ」⁽⁵⁰⁾と評されるほど平壤周辺において日本人と朝鮮人の関係は良好であった。ところが、「穏和」な方法であるとはいえ、平壤民乱においては真つ先に日本商人が運動の対象となっている。運動がこうした方向に進んだのは、知識人による日本帝国主義の構造的把握、およびそれに基づいた指導があったと考えるのはそれほど無理ではあるまい。すなわち、③の類型の民衆は知識人から日本の侵略の構造を「学習」し、やがて日本を直接打倒対象とした戦いに進んでいくのだが、「教えた側」が②の類型に属する場合、日本に対する対応様式が根本的に異なっているので、啓蒙運動時期にはこの両者が交わることはなかった。本稿で取り扱った平壤民乱は、この両者が分化し始める時期に発生した象徴的な事例と考えられるのである。

注

- (1) 月脚達彦「『保護国期』における朝鮮ナショナリズムの展開―伊藤博文の皇室利用策との関連で」(『朝鮮文化研究』七、二〇〇〇年三月)
- (2) 近年、趙景達は「始源的ナショナリズム」という表現を用いて、甲午農民戦争当時の農民軍の意識について「国家の運命と自己の運命を同一視する思想的営為を、民衆はいまだ本格化させてはいなかった」し、「農民軍は決して強固なナショナリズムに突き動かされて日本軍と戦ったわけではない」と述べている。同『異端の民衆反乱―東学と甲午農民戦争』(一九九八年、岩波書店)、第一〇

章「異端のナショナリズム」参照。

- (3) 拙稿「一九世紀末、朝鮮民衆の対日認識について」(『朝鮮史研究会論文集』三三、一九九五年一〇月)
- (4) 吉野誠「李朝末期における米穀輸出の展開と防穀令」(『朝鮮史研究会論文集』一五、一九七八年三月) 一一二頁。
- (5) 同右論文の一―二頁で若干触れられている程度で、管見の限り専論は皆無である。
- (6) 『通商彙纂』一〇一号「本年三月中鎮南浦商況」(一八九八年五月十一日付在鎮南浦領事館報告)に、「昨年當地方ノ秋穫ハ七八分作ナリシニ係ハラズ割合ニ(一八九八年三月中に鎮南浦において――林)出廻リ米ノ多カリシハ全ク一昨廿九年當國近來ノ豊作ナリシニ因ルモノ」と報告されている。
- (7) 『高宗実録』光武二(一八九八)年四月六日条。
- (8) 『通商彙纂』九〇号「三十年十一月中金山港商況」(一八九七年十二月二十八日付釜山領事館報告)。
- (9) 前掲拙稿、一二六ページ、表1参照。
- (10) 註(7)に同じ。
- (11) 『独立新聞』一八九八年三月二十九日付雑報。
- (12) 『高宗実録』光武二(一八九八)年四月七日条。「在今活民之政、宜其移粟設賑、而以今國儲、無粟可移、惟計口給錢而已、各該觀察、可以察邑之緩急、各該邑倅、可以察民之緩急、為先精抄饑口、排日俵給、而以某樣公納取用」
- (13) 『独立新聞』一八九八年四月九日付雑報。
- (14) 『通商彙纂』一〇二号「本年四月中鎮南浦商況」(一八九八年五月二十六日付在鎮南浦領事館報告)。

(15) 『高宗実録』 光武二(一八九八)年五月二十六日条。「目下颯急之方、莫如擴

開貿入之路、自今限五箇月、各港進口穀、特准免稅、以裕民食、以興商務」

(16) 清からの穀物大量流入の情報に接した地方官らは、それまでソウル近郊で秘匿していた穀物を、価格が下がる前に地方に再移動したという(『独立新聞』一八九八年四月一六日付雑報)。

(17) 『通商彙纂』一〇七号「本年五月中仁川商況」(一八九八年七月二十五日付在仁川領事館報告)。

(18) 『通商彙纂』一〇一号「三十年中鎮南浦商況」(一八九八年五月十日付在鎮南浦領事館報告)。「昨年中白米玄米ノ總輸出高ハ當舖ノ調査セシ所ニ據レバ三万千百石ニ過ギザルモ當業者ノ言ニ由レバ五万石以下ニハアラザルベシト云ヘリ而シテ其産出地方ハ重ニ黄海道ニアリテ安岳載寧鳳山ヲ最トシ全額ノ七分ハ此地方ヨリ出ツルモノトス」

(19) 『通商彙纂』六四号「朝鮮國平壤雜事」(一八九七年二月二十日付在仁川領事館報告)。

(20) 註18に同じ。

(21) 同右。

(22) 同右。「其仕向ケ先ハ殆ド仁川へ輸送スルモノニシテ本邦へ向ケ直ニ輸出セシハ(約五万石のうちの——林) 壹萬石ヲ出デザルベシ」

(23) 『通商彙纂』一〇一号「本年三月中仁川商況」(一八九八年五月二十三日付在仁川領事館報告)

(24) 『通商彙纂』一〇四号「本年四月中仁川港商況」(一八九八年六月十七日付在仁川領事館報告)

(25) 『通商彙纂』一〇一号「本年三月中鎮南浦商況」(一八九八年五月十一日付在

鎮南浦領事館報告)

(26) 『通商彙纂』一〇二号「本年四月中鎮南浦商況」(一八九八年五月二十六日付在鎮南浦領事館報告)

(27) 『通商彙纂』一〇五号「本年五月中鎮南浦商況」(一八九八年六月二十五日付在鎮南浦領事館報告)

(28) 特に断らない限り、民乱の具体的様相に関する記述は、一八九八年三月十九日付、在鎮南浦領事館時務代理大木安之助發、駐韓弁理公使加藤增雄宛「平壤亂民蜂起ノ件」別紙、「平壤亂民蜂起報告」(駐韓日本公使館記録 七)六三九(六四〇ページ)及び、一八九八年四月一日付、神谷清警部發、在鎮南浦領事館時務代理大木安之助宛「復命書」(外務省記録、六門一類六項五号「韓国在勤警部巡查各地出張報告書」所収)による。以下、前者を「大木報告」、後者を「神谷報告」とする。

(29) 「大木報告」。ただし、「神谷報告」では蜂起全体の人数を「数百ノ細民」、日本人貿易商店に押し掛けた人数を「三十名宛」と報告しており、かなりの開きがある。どちらの数字が正確かは現状では不明であるが、「大木報告」が民乱当日に平壤に出張していた巡查の報告を基礎としているのたいして「神谷報告」は三月二十六日からの現地調査報告であるため、前者の方がやや信憑性が高いかもしれない。

(30) 「大木報告」。「神谷報告」には「李謹相其他多少智識アル者三四名ヲ頭トシテ」とある。

(31) 「大木報告」。

(32) 光武二(一八九八)年三月十六日付、平安南道觀察使趙民熙發、外部大臣閣種黙宛「報告書第二」(平安南北道去來案 第二冊)、「各司騰録」三六、所収)。

（32）ここでは、一度は拒絶された防毅令発令を、趙が再度要請している。

（33）「大木報告」。

（34）「大韓帝国官職履歷書」（国史編纂委員会、一九七二年）九十四ページ。

（35）本会会報（『大韓自強会月報』第四号、一九〇六年七月）。この記事には「平壤会員李謹相氏」が支会設立請願書を提出したことが記されている。当時は大韓自強会が支会規則を定めて地方支会設立に動き出した直後で、李謹相は啓蒙運動の初期から活発に活動していたことがわかる。ちなみに、彼はのちに西北学会会員にもなっている（『西北学会月報』第八号、一九〇九年一月）。

（36）前掲拙稿、一三四ページ。

（37）「大木報告」。

（38）同右。「幾分ノ低価」に関して「神谷報告」は、「時價ヨリ五分ノ安價ヲ以テ米穀ヲ發賣」したと記している。

（39）「神谷報告」

（40）一八九六年三月三十一日付、外務大臣臨時代理発、英、佛、獨、澳、露、伊、米、蘭、清各国公使宛「朝鮮各地暴徒蜂起ノ件 三」（外務省記録、五門三類二項八号「韓国各地暴動雑件」所収）。平壤から仁川への引き上げ完了は三月二十七日。

（41）一八九六年六月四日付、西園寺外相発、英、佛、獨、澳、露、伊、米、蘭、清各国公使宛「朝鮮各地暴徒蜂起ノ件 十」（外務省記録、五門三類二項八号、「韓国各地暴動雑件」所収）。

（42）「神谷報告」別紙。

（43）「神谷報告」に「相當ノ方法ヲ以テ銃器ヲ準備スルコトナシ」とある。

（44）一八九八年五月二十三日付、在鎮南浦領事館時務代理大木安之助発、駐韓弁

理公使加藤増雄宛「平壤細民蜂起ノ件」（『駐韓日本公使館記録 七』六四〇～六四一ページ）。

（45）同右。

（46）同右。

（47）前掲拙稿、一二八～一三〇ページ。

（48）呉世昌「英学党研究」（『溪村閔丙河教授停年紀念史学論叢』一九八八年所収）、四六九～四七〇ページ。

（49）前掲拙稿、註51参照。

（50）「平壤地方概情」（在仁川領事館時務代理領事官萩原守一の報告、『官報』第三九八四号、一八九六年一〇月七日）。

The Pyongyang Rebellion of 1898

HAYASHI Yusuke

The civil rebellion that broke out in Pyongyang during March 1898 were caused by rapid inflation in grain prices due to exporting by Japan, and the targets of the rebels were Japanese merchants, as opposed to Korean grain traders and local officials who were targeted in similar disturbances in other regions. Furthermore, many people perceived Japan as a threat to their livelihood and decided to go directly to the source to root it out, possibly marking the first movement of its kind in Korean history. The rebel were led at the beginning by an intellectual named 李謹相 evolved in the form of demanding that Japanese merchants cease taking grain out of the country, but soon things got out of hand as the peaceful protests desired by the rebellion leaders turned violent, and groups appeared attempting to stop exporting by force. These groups, which were not affiliated with 李謹相's movement, were grain brokers at the lowest rungs of society, who believed that unless the Japan was brought to its knees by force, they would not be able to earn a livelihood. It was this social stratum that at the last stages of the rebellion formed the volunteer army in the anti-Japanese resistance movement, and thus paved the way for the genuine development of Korean nationalism. However, the reason why they were able to understand the structure of by which Japan was threatening their livelihood was because their education experience during their compromise alliance with 李謹相's movement. Intellectuals like 李謹相, who later became involved in the selfimprovement through education movement, were not able during that movement form alliances with the lowest strata of society due to differing ideas about how to deal with the Japanese; however, during it had been possible during the Pyongyang Rebellion, meaning that one characteristic of the Rebellion was the formation of a watershed of sorts that would divide the two in the future.